

Photographic Society of Zone System

ゾーン・システム研究会会報

発行日：99' 12/1

発行者：中島 秀雄

編集部：

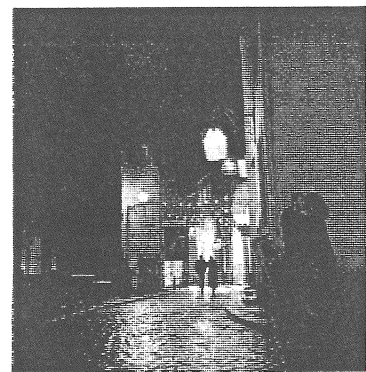
編集レイアウト：篠原 康之

内田 順

vol.15

CONTENTS

- ・研究会の展覧会を終了して
- ・オープニングパーティ
- ・時空の拡張
- ・ゾーンシステム テクニカルアドバイス
- ・ピラタス撮影会に参加して
- ・ゾーンシステム ワークショップ
- ・Information



研究会の展覧会を終了して

中島秀雄

第4回研究会展覧会が終わり、参加した会員には大変お疲れ様でした。

最終日には偶然立ち寄ってくれたフィンランド大使館文化事業部のアンヌッカ・クリング女史が、我々のプリントに強い興味を示し、3点ものプリントを購入してくれるという思っても見なかった出来事がありました。アートに対する理解と行動力に、我々とは違う何かを感じたのは私だけではなかったでしょう。努力してきた研究会にとっていい出来事でした。フィンランドについて多くは知りませんが、深く入り組んだフィヨルドの国と聞きます。高校時代シベリウスのフィンランディアという難しいトランペットの曲を合奏したことがあり、透明感溢れる美しい国という印象が残っています。来年はフィンランドの写真家が日本で展覧会を開くとききました。我々の写真とイメージに共通するものがあるかもしれません、楽しみです。

アダムスの写真展で始まり、アダムスの写真展で終わろうとしているこの年に我々の展覧会ができたことは幸運であったと思います。比較され、批評され、批判されたことでしょう。我々は忙しい一年の中で努力して生み出してきたもの、大いに批判され比較されようと思いません。しかし、ただ批判されるだけで終わりにしたくない、アダムスのプリントを細部にわたって見つめ、多くの発見と気づきのためのエネルギーにしたいと考えます。研究会の発祥の地川崎市民ミュージアムでのアダムスの展覧会は、我々にとって特別な展覧会だと考えたい。広い会場でもあり会員が集い、ゆっくり見る時間を設定したいと思っています。

新しい会員による作品も展示され、バリエーションも豊かになりました。若い見学者が多かったことも今年の特徴です。若い見学者の多くは作者自身に強い関心をもって、我々のような写真を見るのは初めてだろうし、戸惑いもあったことでしょう。それだけに我々の表現のスタイルをもっと若者に語る必要もありました。私は音楽をやる若者達と写真の話をしました。彼らは音楽と関係付けながら理解しようとしているようで、写真と音楽の話が行ったり来たりで30分ほど語り合った。写真

を続けるには何が必要か、写真を理解するにはどんなことから入れればよいのか、才能は自然に現れるのか。音楽は基礎がなくても好きな曲を多く聞き、演奏に努力することで開けて行けると彼らは語っていた。音楽も写真も経験の中から表出できるアートといえる。話しの後、彼らは再び写真を見直す態度に好感がもてました。写真と音楽には共通するものも多く、音楽に興味のある人は写真に対する理解も早いものと思う。アダムス、ウィン・バロック、ポール・カポニグロは音楽を経験し写真家になった人達です。リズム、ハーモニー、イメージは写真も音楽も脳の中では同じものかもしれません。目と耳の違いだけでしょう。そういえば、音楽も写真も道具にこだわることも似ていますね。我々の表現のスタイルは音楽でいえばクラシックかもしれません、そしてそこから抜け出し、やがてクラシックモダンを求めていくことになるのかもしれません。もし迷うことがあればアダムスやウェストン、カポニグロやウィン・バロックに戻ることです。このベースから大きくはずれることは無いでしょう、もしはずれるなら我々の存在は意味が無いし、多くの人がすでにやっているのです。事件、事故、有名人、コンテスト写真、スキャンダル、扇情的な写真でもない、人間が求める基本的な美しさや心の潤いを追求していきたいと考えます。時代が求める激しい欲望にも流されてしまえば、我々の写真は成立しないでしょう。フィンランド大使館の職員が我々の写真に興味をもったのは偶然ではないと私は考えます。

会期中に入会希望者が数人いました。ワークショップからも希望者がいます。銀塩写真の美学に積極的に参加したい希望者に、会員はぜひ手をさしのべていただきたいと思います。

展覧会に関わってくれた実行委員及び役員、プリントのコレクションに積極的に協力してくれました皆様に感謝いたします。

- 平木収先生からもすばらしい文章をいただきました -

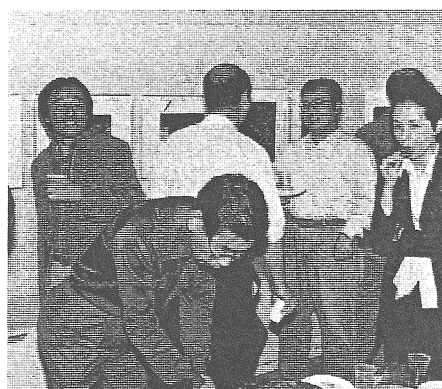
参加者は以下の22名、29点の作品でした。

荒井崇、石川昭、内田順、上原治雄、小野望、管野慶孝、木下威、済藤隆義、佐伯勝幸、佐野司郎、西野誠一、畑文夫、ハビー・山口、古川翔士、藤枝義弘、本田勝美、松本ひさ子、宮岡貞英、山下誠一、山本昭二、諸見里朝和、中島秀雄（敬称略）

オープニングパーティー

11月3日、オープニングパーティーが開かれました。当日は研究会の活動に興味をもち、毎回来てくれる知人友人、出展者の個人的な友人ファン、会員の総勢50人以上が集まり、ギャラリーの内と外に人が溢れました。初日にプリントが何点か売れたり、研究会会員申し込みがあったりで、前回とは少し違った賑わいでした。二次会には22人が参加して、大変盛り上がりました。

尚、パーティーに出席していただいた方々からお祝いの品をいただきました。また川崎市民ミュージアムの林華子学芸委員からも、お祝いの花をいただきました。林さんからは毎年我々の展覧会にお花をいただいています。誌面を借りて厚く御礼申し上げます、ありがとうございました。



時空の拡張

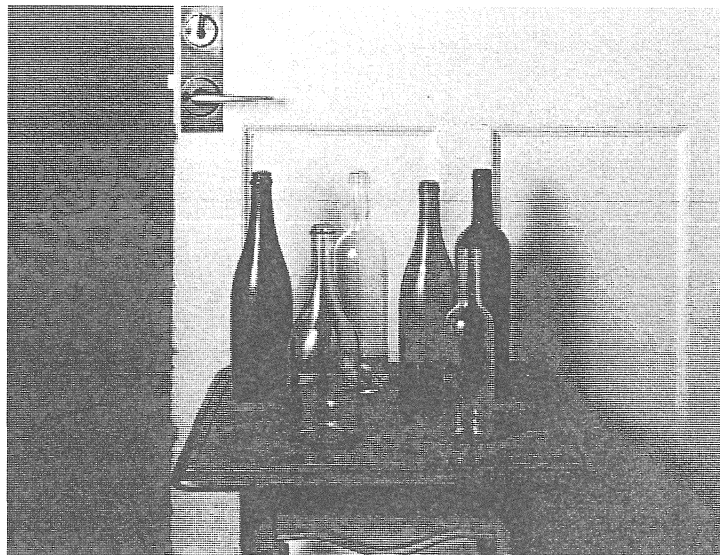
写真を見ることの喜びは、視覚を通じてさまざまな体験ができることである。自らに関係する写真は、かつて経てきた時を呼びもどし、現在と過去の時間差の中に、自身の存在を位置づけてくれる。

他者の撮影した写真を見ることは、その写真を撮った人物の視覚や感覚などの体験を、譲り受けることにつながり、ひとりの自分の枠を抜け出て、一個の人間が他者の経験を共有するきっかけとなる。

こうして写真は一個の人間の生きている時空を、視覚を通じて拡大してくれる。だが、どのような写真でも、そうした悦ばしい作用があるとは限らない。良質の写真のみがそれを可能にする。逆説的にいうと、そうした個人の人生を拡張してくれるような写真が良質の写真なのである。



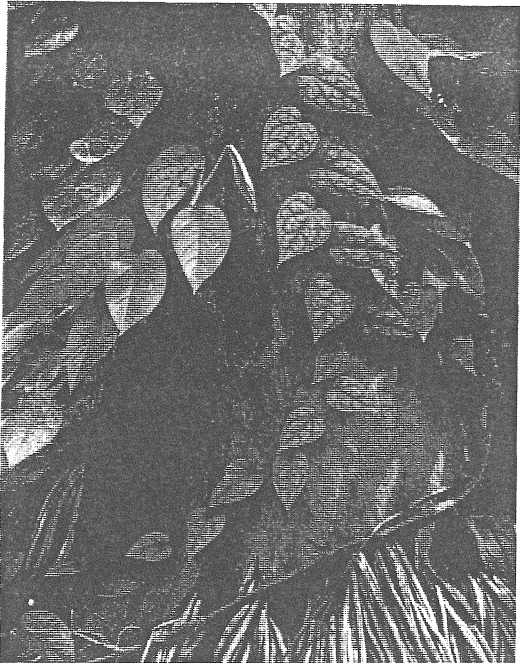
中島秀雄” Momarial Park”



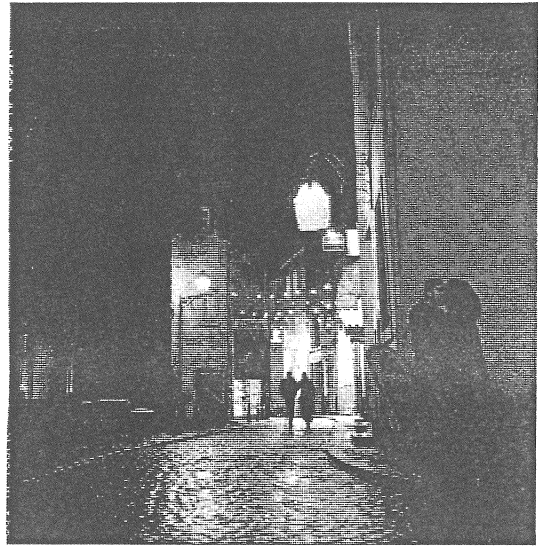
菅野慶孝 ” Bottles”

ゾーンシステム研究会のメンバーが目指しているのは、アンセル・アダムスによって考案された良質の写真を達成する理論を根本に据え、相互いに悦ばしき感覚の交流を計り、各々の経験を互いに分かち合い、厚みと奥行きのある生の時間を得ることであると思う。ことばにすると、どこか求道的になるが、ゾーンシステムは、それを用いて、良質の写真を得ることで、よりよき人間的コミュニケーション、つまり表現を行なおうというものだから、そういうことになる。

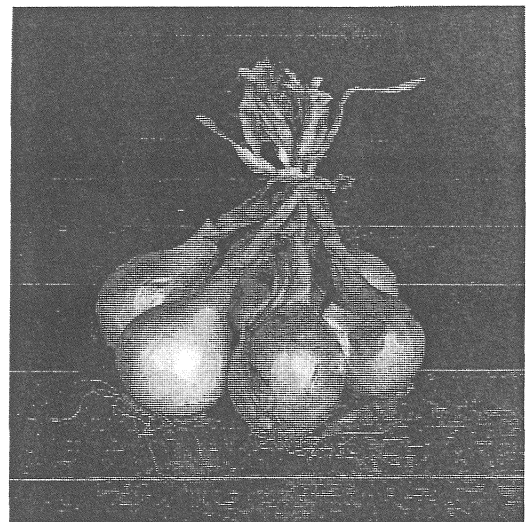
今回のグループ展は、作風のバリエーションが豊かになっているが、この幅はメンバーたちの生の時空の拡張に直結するものと思う。 写真評論 平木収



藤枝義弘” Ivy”



ハービー山口” Street at
Midnyght”

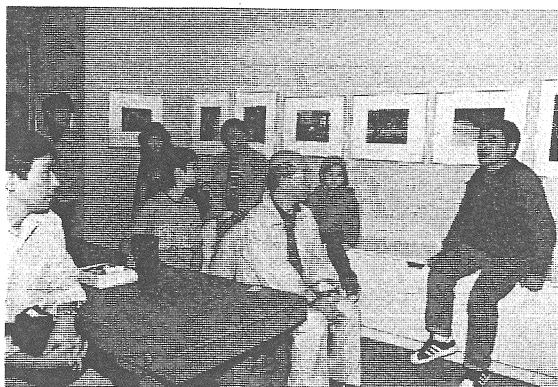
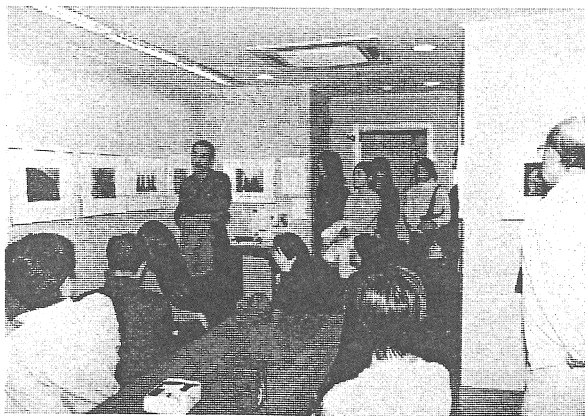


佐伯勝幸” Onion”

フロアレクチャー

11月6日この日は土曜日で、川崎市民ミュージアムの受講者がギャラリーに集まり、フロアレクチャーになりました。これは事前に計画していたものではなく、集まっていた会員に自分の作品について語ってもらいました。他に何人かのお客様がいて、思わぬ写真講座になり、クローズ時間を15分オーバーして終わりました。作者が自分の写真を語るのには、作品について見落としている部分に気がついたり、作者のキャラクターも現れ楽しいものになりました。

次回からはもっと積極的に行ってもいいかもしれません。あるいは事前に文章にしておくのもいいかもしれません。



連載

ゾーンシステム・テクニカルアドバイス

プレゼンテーションと展示

ギャラリーへのプレゼンテーションや雑誌掲載のためのプレゼンには、プリントをそのまま見せる方法もあるし、ファイルに整理して見せることもある。またボードにドライマウントしてまとめて見せるほうが効果的なこともある。しかし、ギャラリーや見せる相手によって、ドライマウントされたプリントは扱いにくく、断られる場合もあるので注意が必要だ。

展示にも様々な方法があって、会場の床にプリントを並べたり、壁にプリントのままピンで止めたり、また天井からワイヤーで吊ったりしてかなり刺激的な展示方法もある。展示方法は作品の内容に合わせて十分考える必要があり、また見る側への配慮も必要だ。一方的に見せる側だけの方法で進めても十分理解されないでしょう。ファインプリントは本来プリンを直接見ることでその美しさを楽しむもの、それを一次的見方とすれば、ギャラリーで見るのは二次的な見方といえるかもしれない。そう考えると展示は余計なものは排除し、シンプルに装丁の方が作品の質を高めることにもなり、その方が効果的でしょう。

次の二つの方法がプレゼンと展示の標準的なやり方です。

ドライマウント方式

ミュージアムボードにドライマウントする方法は、プリントが完全にフラットになり展示効果は大きいといえる。直接プリントにふれることもなく、保管したりプレゼンテーションしたりするにも扱いやすい。またいつでもそのまま展示することもできるし、窓を開けた4Plyのミュージアムボードにブックマットすることも簡単にできる。しかし、この方法にはドライマウントプレス器やタッキングアイロンが必要になり、個人が準備するとなると難しい面もある。また、ドライマウンティング・ティッシュやミュージアム・ボードが、完全にパーマネンス性があるかまだ定まっていない問題もある。

＜無酸性紙のボードを使う＞

ライト・インプレッションズから販売されている100%ラグボードは綿から作られている。ペーパー値は8.5-9.5くらいになっていて、長期間使用しても無酸性を維持してくれる。

色見:	厚み
ブライト・ホワイト	2ply
アイボリー	4ply
ナチュラル・ホワイト	8ply
ナチュラル・クリーム	

ドライマウントの方法

準備:

ドライマウント・プレス器、タッキング・アイロン、アーカイバル・マウント・ティッシュ、2Plyのミュージアム・ボード、カッタナイフ、定規、ビニールマット

1. プレス器に一回り大きめの2Plyのミュージアムボード2枚を差し込み90-100℃まで暖める。プレス器の余熱とプリント保護ボードを乾燥させるのが目的。
2. マウントするためのミュージアムボードを乾燥させた2枚の保護ボードの間に差し込み、両面を3分位乾燥させる。乾燥オーバーに注意。
3. プリントも2分程乾燥させる、このときプリントの両面や保護ボードにゴミ、ホコリがないか確認することが大事だ。
4. ボードもプリントもクリーンで平らな所で熱が冷めるのを待つ。
5. 冷えたプリントの裏に、一回り大きいアーカイバル・マウント・ティッシュをタッキングアイロンを使って一方所だけ接着する。
6. プリントの余白をティッシュと一っしょにカットする。

7. ボードの指定の位置にプリントをのせウエイトで押さえ、プリントの裏にあるティッシュの一角をボードに接着する。プリントにボードにティッシュは一角だけでとまっている。

8. ゴミ、ホコリがないことを確認し、プリント保護ボードにサンドイッチしてプレス器に差し込む。およそ2分間プレスする。

9. プレス器から取り出し、クリーンで平らな所で熱を冷ます。強制的に熱を取る鉄板も売られている。

10. 熱が取れ、フラットになったら額装までストレージボックスに入れておく。

直接ブックマット方式

フラットニングされたプリントを2Plyのボードに直接コーナーで留め、プリントの大きさに窓を開けた4Plyのボードと重ねてリネンテープでブックマットする方法。プリントに余分な熱を与えることもないし、いつでもボードからプリントをはずすことができ、必要ならプリントの差し替えもできる。美術館やギャラリーでのプリント収集や保管にはプリントのみ要求される場合もあり、また個人で収集したり、保管するときボードがない分スペース的には有利だ。ただし直接プリントにふれることになり、扱いには十分注意が必要で、ホワイトグローブの使用が欠かせない。また季節にもよるがフラットニングしたプリントであっても展示している際に再び歪みがでてくることもあり、これが嫌いだという人もいる。

準備:

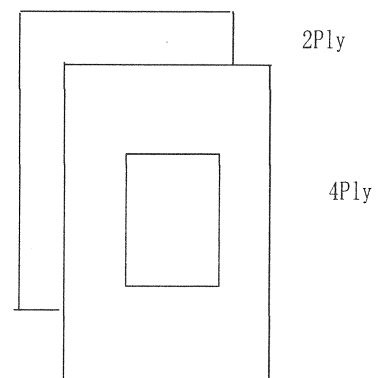
2Ply, 4Plyマウントボード、マットカッター、リネンテープ、フィルムプラスト・テープ、コーナー用中性紙、

1. 必要なサイズにカットされた4Plyのボードに窓を切り抜く。プリントに余白があれば画面より4辺の余白10%分大きく窓を開ける。この方法は、プリントの余白に作者のサインを入れたときサインが見えるようになる。ボードに対する窓の位置は、真ん中より少し上がバランスがよく、上辺の余白45%、下辺の余白55%がよい。

2. 2Plyと窓を開けた4Plyのボードの内側をリネンテープで止めてヒンジとする。

3. プリントを窓に合わせ、2Plyにコーナ止めする。中性紙でコーナーを作ってフィルムプラストで止めるか、既成のコーナーを使う。

4. 額装までストレージボックスに収納しておく。



※マット加工は専門の業者もあり、そこに持ち込むのも一つの方法。

次回はフレーミング

ピラタス撮影会に参加して

植村栄一

撮影会に参加させていただくのがこれで2回目ですが、葉書をいただいた時 -20°C の防寒着があればどなたでも大丈夫という言葉に甘んじて事前ミーティングにも参加する事ができず、当日高速サービスエリアで皆さんと会うことになりました。私は山に登ることなどほとんど無く、まったくの軽装備で、撮影機材だけ持っていけばどうにかになってしまうのだろうという気持ちで参加してしまいました。

ロープウェイに乗る場所も -7°C 。回りの皆さんは、車の中から山に入る用意を入念にしているのに、自分は用意する物がないので、なんだかわからないうちにロープウェイに乗っていました。中島先生がポツリ「山の上は -17°C です。」 -7°C でもこんなに寒いのに、とんでもない所に来てしまったという気持ちでした。自分は、雪の中で三脚を立てることも経験が無いので、三脚は雪の中に埋まってしまうし、自分も自分の体重で、股まで雪の中に入ってしまうし。誰も見ていなくて良かった場面が何回もありました。撮影というよりも寒さと雪の格闘で、どんどん時間が過ぎてしまい、山小屋に宿泊する事も経験が無く、外が -17°C という事もあって窓ガラスの内側の結露は凍っているし、山の上なので電気、ガス、水道もなく、夜7時頃なのに寝ることしかする事がありません。

時間に追われて毎日生活している都会生活に比べると、反面7時に寝られる事がすごく幸せに感じました。しかし横になって目を瞑ってうとうとしながら寝ていても、あまりの寒さに頭痛で何度も目をさましてしまいます。あまり外に出る事がない自分にとっては、実験のようでした。寒い所で寝るとこうなるんだとか、 -17°C の中で長い時間いると体はこうになってしまうのだ、などいろいろな経験することができました。

ゾーンシステムにまだ慣れていない私にとって、樹氷の雪景色を目の前にすると、どこをどのように撮影してよいのか、何をフレームに入れて何を省くか、ファインダーを覗いているだけでなかなか結果がでません。スポットメーターを覗き、いろいろなスポットを測光するのですが、今自分が何をしているのかが、わからなくなってきました。コンタクトプリントを作成してみました

が、現場で想像していたゾーンには、ネガはなかなか難しいようになっているようです。土、日曜日なかなか休みが取れない私には、なかなか楽しい2日間でした。いろいろな場面で不慣れな事もありますが、日々努力し、向上させて行きたいです。また宜しく願いいたします。

ゾーンシステム・ワークショップ（講演と実演）

中島秀雄

11月28日川崎市民ミュージアムにおいてゾーンシステム・ワークショップが行われました。これは当美術館が開催しているアンセル・アダムの世界展の関連イベントとして行われたもので、2時間の中で解説と実演を行うものです。募集定員は50名となっていたところ238名もの応募があり、美術館始まって以来の応募数だったようです。受講者の中には西は岐阜県、北は岩手県や仙台市からの参加者もいて、高校生くらいから70才の年輩までと幅がありました。70才と分かったのは質問のとき自ら告げたことから分かりました。また比較的若い女性が多かったことも特徴で、これはアダムスファンの幅の広さを表しているものと思います。当日は朝早くから会場の席取りの電話あったり、なぜ自分が抽選にもれてしまったのか説明してほしいといった電話もあって、担当者の林さんも大変だったようです。

2時間の中で解説と実演、質問の時間も必要で、時間の配分を気にしながら始めました。ゾーンシステムの話をごの場所で、しかも一般公開というのは私にとっても初めてのことで、その上アダムの会期中ということもあり、いくぶん緊張もしていました。こういうときは最初から難しい話しは避けた方がよく、慣れた話しからスタート

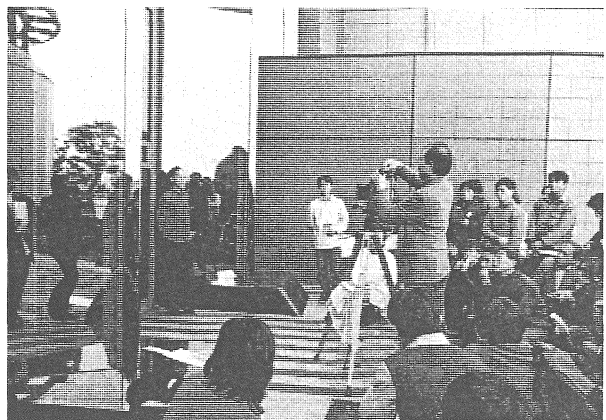
するにかぎると経験からわかっていたので、当美術館による定例のワークショップが昨日終わったことの話からスタートしました。そして、いつものように写真集や写真の説明、ポラによる撮影解説と進み、外での撮影実習に移りました。

当日は天気も良く、外での実演には最適でした。モデルは私が受講者の中から選びました。ポラロイドによる実演と解説にはゆっくりと時間をかけたこともあって、多くの受講者がうなずき納得してくれたようです。受講者の一人がポラで実際に撮ってみたいという希望もあり、メータとゾーンの位置づけから露出の決定までを迷いながら進めたことで、受講者から笑いも出てきて、緊張もだいぶ解けてきました。スポットメーター、ビューイングフィルタを見たいと手に取る人もいたり、私が作ったゾーンと露出を説明するためのパネルはどこに売っているのか質問する人もいて、先生が作れば売れますよと冗談をいう人もいました。また撮影記録ノートには女性が強い関心を示していました。そういえば会場で私の話を熱心にノートする人は女性が多かったように思います。

再び教室に戻り、質問の時間になりました。あらかじめ質問用紙に記入してもらったものを私が読む形をとりました。

Q カラーでゾーンシステムは可能か。

色と明るさの問題が出てくるので難しい、現像時間の調節もできない。



Q35ミルカメラでゾーンシステムはできるか。

アダムスは35ミルゾーンシステムを発表している、その気があればできる。

Qゾーンシステムに適したカメラはなにがあるか。

ハッセルブラッド205FCCがある。

Qゾーンシステムの具体的なやり方は。

フィルムの感度を見つける、標準現像時間を見つける、ゾーンルーラーの制作。

Qフィルターを使うと色によって反射率が違うがどうするか。

ゾーンVI社のメーターを勧める、色に対して正しい反応する。

Qスポットメーターとビューイングフィルターのメーカーはどこか。

ゾーンVI社、販売はカルメット社

Qフィルム現像とプリントの関係を知りたい

正しいネガを作ることがまず大事になる、正しいネガがあればプリントはうまくいく。

Q大型カメラの選び方は。

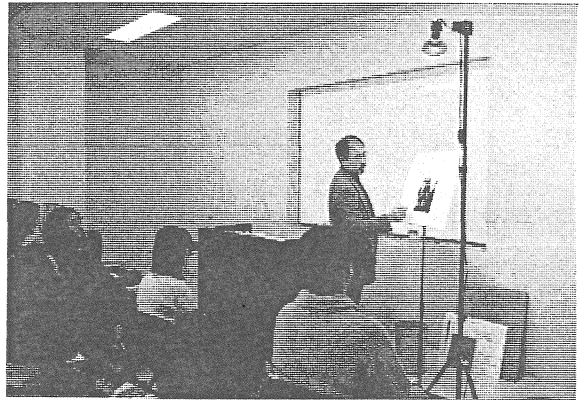
まず何を撮るのか、それでカメラは決まる。アダムスは木製のカメラを使っていた。ディアドルフもいいし、ゾーンVI社も勧める。

最後の10分程で私のプリントを見ることにしました。アダムスの写真とは違う自分たちに近いイメージとして



興味をもってくれました。カメラ、印画紙、場所はどこといった質問があり、講座終了後はプリントの回りに集まりました。

受講者の中には、アダムスの日本語版を読んで独学でゾーンシステムを実行している人も何人かいて、ゾーンシステムに対する情報が不足していることを嘆いていました。ゾーンシステムに対する日本語版が早く必要なことを改めて感じました。また、当日はゾーンシステム研究会の案内も全員に配布し、研究会の存在を知らせる絶好



の機会にもなりました。多くの受講者が興味を示し、後日、研究会入会の問い合わせのTELがありました。



Information

『売ります』

EL ニッコール

50F2.8 8,000円 程度上

80F4 3,000円 程度下

KODAK

8×10ハンガー(6枚) 15,000円 新品

8×10用300ミリf6.3エクタ-80,000円(シャッターOH済) 程度中

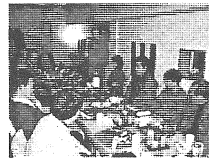
ゾーンシックス

4×5レンズボード 2,000円 新品

4×5フレネルスクリーン 3,000円 程度中

内田

忘年会スナップ 撮影：畑さん



『買います』

- ・8×10用 フィールドカメラ
- ・8×10カメラ用 撮影レンズ 基本的なものを2～3本程度

- ・8×10引伸機用 レンズ
 - ・8×10用 フィルムホルダー
- いずれも価格は相談させて下さい。
京都 本田

<原稿募集>

会員の皆様からの原稿・情報を常時お待ちしております。

原稿送付方法

フロッピー・MOは、Mac、Windowsどちらのフォーマットでも可。圧縮無しのテキストファイルで。メールも同じ。

手書き原稿はタイピングの必要があるので原則受け付けません。100文字程度の雑文は可。できれば、プリントアウトが嬉しいです。写真はネガ・ポジ・プリントいずれも可。

(篠原)